
終わりのなき進化

マイペース

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

終わりになき進化

【Nコード】

N6132Y

【作者名】

マイペース

【あらすじ】

目が覚めたらなんか液体がなみなみと詰まったカプセルの中にいた。……え！？ ということ！？ 俺、死んだんじゃないかったわけ！？

この作品はシリアス、ギャグ、ラブコメe t cなどの成分配分は作者のその場の気分によって決定されます。よって『考えるな……感じるんだ！』という漢気精神を持たない方は読むのをオススメしませんので、そのところをよろしく願います。まあ、持ってい

ない方は、きつとこの物語を読めばゲットできると思つので、どうか1度お読みくださいwww

第1話 マッドとカプセルとハードボイルドから始まる新しい人生（前書き）

と、いうわけで、活動報告に書かせていただいたように、大改定して再投稿。たぶん、この前のよりはイケたんじゃないかなー、というぐらいの出来にはなりました。

それでは、どうぞ！

第1話 マッドとカプセルとハードボイルドから始まる新しい人生

Side
富士樹海
地下研究施設
??????

あ……ありのまま起こったことを話すぜ！

『火事になっていた家から家族を助け出してそのまま死んだと思って、そして気がついたら、幼児体型になっていて、しかもドラゴンボールでセルの幼体が入ってたようなカプセルの中にいた』

な……何を言ってるのか分からねーと思うが、俺も何が起きたの
か分からなかった……頭がどうにかなりそうだ……

輪廻転生とかタイム風呂敷とかそんなチャチなもんじゃあ断じてねえ。もっと恐ろしいものの片鱗を「クハハハハ！」遂に……遂に完成だ！」……ネタを途中でぶった切られた……だと……？

[illegible]

あー……。自分が幼児になっ
てゐるうゑに直ぐ傍で白衣着
てるおっさんがイっちゃつて
る感じで高笑いをしている。
……何この状況、シュール
すぎるんだが。

……まあ、それは置いて今はとりあえず状況の整理をしよう
まず、俺は高校2年生の一般人。それで今日はお気に入りの漫画の
1つ『魔法先生ネギま!』の最新刊の発売日だったんで買いに行き、
無事に手に入ったので早く読もうと思い家に帰ったら、『あつはつ

は。見る、家がゴミのようだ！』な感じでキャンプファイヤー……

それで近くにいた野次馬が「聞いたかオイ、あの中に人がいたま
ま出てこれねーんだってよ」なんて言っているのが聞こえ、それを
聞いた俺は消防隊員の制止の声も無視して家に飛び込み、家族を全
員助け出した。いいものの、自分は全身大火傷で死んだ。……そう
だ、確かに俺は死んだはずだ。それがなぞ「H A H A H A H A H A
H A H A H A H A

！！！！！！！！！！」「ええい、いつま
で高笑いしてやがるこのイカれ中年があッ！

「ははハはハ…… っと、危ない危ない。一応は完成したとはいえ、このまま我が作品達を出してやるわけにはいかない。最終確認を早くしなければ……」

やっと高笑いをやめたと思ったら、今度は何かブツブツと言い出した。それが伸ばし放題の髪から覗く不気味に光る目や歪み過ぎていつそ裂けるんじゃないの？　といった感じの口元と相まってヒジョーにキモい。

……と、今度は何かこつちに近づいてきて、俺が入ってるカプセルの前に設置されているキーボードらしきモノや、魔方陣のようなモノ。それに他にもよく分からないモノを弄り始め……ん？ 今俺は何を弄り始めた言った？

えーと、キーボードや、魔法じゅ……ハアアアアアア！？
マホージン！？ え、どういうこと！？ なに、もしかしてここは
何百年か先の未来かなんか！？ 実は俺は死んでなんかいなくて、
なんらかの方法で生きていてずっと復活の時を待っていたとくっ
フフ……これで人類は21世紀を迎えることもないだろう。そう、
この私が王となつて、新世紀、新世界としてこの星は生まれ変わる
のだ……！！」むしろ遡っていただとう！？

「ククク……しかし私は本当に素晴らしい。何せ、未来の技術や超
ストテクノロジー
古代文明の技術を駆使し身体能力はもちろん、魔法使いとしても無
敵の潜在能力。更に超能力の才能や、その他さまざまな潜在能力、
そして神にすらなりえる潜在能力すらを持つ存在を5つも創ってし
まうとは。……まあ、何故か1人だけ男になつていたのは失敗だっ
たが、それもよからう。大切なのは、これからのことだからな」

とうとう、魔法だの超能力だの言い出した。そして極め付けには
神の力と来た。どうやらこのおっさん見た目以上に頭がイっちゃっ
ているひとだったらしい。……ん？ 5つ？ えーと、状況とこの
マッドっぽいおっさんの言動から類推するに1人は俺のことだよな
じゃあ、あとの4人は？

そう思っていた所に、なんか都合よくカプセルが回転しだしたの
で、周囲を更によく見る事ができた。

まず、いつたいどこまで広いのかというくらい、高く大きく薄暗
いこの部屋。行ったことはないからよくわからんが、たぶん東京ド
ームなんか目じゃないくらい広いんじゃないだろうか、これは。

次に、俺のカプセルにケーブルやら何やらで繋がっているよく分
からない機械。そしてなんか現代科学ではありえない感じの光の線
で繋がっている（ように見える）、よくわからない機械？ や、な
んとも形容しがたい形の物体。

そして次に、古文書という形容詞が一番似合う感じの古めかしい
東洋系の本や西洋系の本でできたヒマラヤ山脈。なんか宝石とかで
ゴテゴテとした凄い高そうな本や、開いただけで呪われそうな禍々
しい雰囲気放つ本が混じっている。

更に次が……俺の左右に2つずつ置いてある、俺が入っているの
と同じようなカプセルに入った4人の少女達。ちなみに、何故女だ
と分かったかという……男ならついているべき、『約束された勝
リハ
利の剣』がなかったからだ。

え？ 変態？ ……ボクハヘンタイジャナイヨー、コレハアクマ

デグウゼンミエチャツタダケダヨー。

……しかし、周囲を見渡せたはいいが、むしろ余計にわけが分からなくなつた。どう見てもマッドっぽいおっさん。とてつもなく広く高く大きい薄暗い部屋。陳列された機械郡。てっぺんが見えないくらい高く高く積み上げられた本の山。^{ヒマラヤ山脈}そして極めつけに俺も含めた5人のカプセルに入った幼児達。……これはいったいどういう状況だ。余りにシニールすぎる。なんで俺のような一般人高校生がこんなことに？

……てーか、意外と落ちついてんな、俺。……いや、これはあれだな。異常事態過ぎてむしろ逆に処理落ちして落ち着いてる感じた。まあ、こうして落ち着いて状況確認ができるのはいいことなので、別にそれはいいか。

それにしても、5つのカプセルを弄りながらもさつきから1人だけ男がどうかブツブツ言い続けているが、このおっさん。言っていることが本当なら、ナルホド、イカれてはいるが確かに天才だが、何故、男だとダメなのだろうk「くそ、この私の『光源氏ハーレム大作戦』これで君もモテないなんて言われない」が……。確かに世界征服のついでぐらいにしか考えてなかったが、まさかこんなところで躓くとは……」……このおっさん、ド変態でもあったらしい。その才能とそこから来る情熱を向けるところを激しく間違えている気がするの俺だけだろうか。

「まあ、いい。所詮はついでだ。この私の真の目的……世界征服のためなら、この程度の失敗は許容しよう。……それに、まだ4人もいるからな。ククク、未来の私のリア充ぶりが目に浮かぶようだ。フフフ、アーツハツハツハッ！」

（イヤイヤ、まるで受け入れてねーじゃねーか！　つーかどんだけ

救いようがない変態なんだよアンタ！　しかもよく聞いたら世界征服とか言ってるし！）

……まあ、それは置いてこう。とりあえず今の俺の状況だが。体は子供、しかし精神はそのまま。これらのコトから考えるに……もしかしてあれだろうか。よくある二次創作でありがちな、転生とか憑依とか、そんな感じ。いや、俺、神様なんて存在に会ったことないから、きつと憑依だろう。いや、確かに最初は違うみたいなこと言っていた気がするが、あれはボケだからいいんだよ。まあ、途中でぶった切られたけど。

……え？ やけにあっさり結論を出すな？ あっさりっ！ か、もう面倒臭えーだよ、考えんのが。 あれこれ考えるのは苦手じゃない、むしろ得意な方だが、好きというわけじゃないので、もうやめる、ウン。 異論は一切認めん。

[illegible]

また高笑いをしだした。そして、俺達のカプセルに満ちていた液体が抜けていき、完全に空になったら今度はカプセルがゆっくりと上へと上がっていき、俺は外気へと晒された。と思ったら足元がフツカフカのベッドシーツ的なものに変わりそこに寝かされる。

ていうか、どうやら俺……というか俺達は、なんかやたら壮大そうな悲願の礎としてこのおっさんに創られたらしい。まったくやる気が沸かないが。

だってそうだろう。ついさっき（少なくとも俺の記憶では）までのただの高校生だった俺が、急に世界征服とかありえないだろう、常識的に考えて。……まあ、この状況が既に常識からマツハ……イヤ、

光の速さぐらいで遠ざかった場所にある気がするが。

[illegible]

うーむ、しかしこのおっさん、いつそ清清しいくらいに悪役だなあ。それもド3流の匂いがプンプンする感じの。さっきから思っていたが、言動の一つ一つまで死亡フラグを立てているようにしか聞こえないし。もしかしてワザとやってんじゃねーのか。間違いない。正義の味方にあっけなくやられるだろ、コレ。

……ん？　なんか床が光ってる？　……魔方阵、か？　しかし高笑いしまくっているおっさんは気づかない。　いったい、何が？

そして、魔方阵が一瞬更に激しく輝き、光が収まると

「お楽しみの最中すまないが、生憎、お前の野望とやらはここまでにだ」

ドゴオオオオオオン………

「グボアアア！！？」

……へ？　こ、今度はいつたい何が！？　何かスゲー音がしたか
と思ったらおっさんが吹っ飛んでいったぞ！？　ホント、次から次

へと何なんだ!?

「グフツ。……な、何事だ!? 侵入者か!? ……って、な、な
なな、貴様は」

吹っ飛ばされて機械の群れの1つにぶち当たったおっさんが、ぼろぼろになりながらも慌てて起き上がり（と言っても超遅くだが）周囲を見渡す。そして、魔方陣のあった場所に立っていた人物を見て驚愕……いや、戦慄していた。

俺も気になるが、流石に目覚めさせられたばかり、まったく体が動かせない。どうしたものかと思っていると、おっさんがぶち当たったせいでブツ壊れた機械の破片がうまいこと鏡のようになって、おっさんの見えているほうが見えるようになっていた。これ幸いと早速見てみたら、そこには

啞え煙草に無精髭、そしてスーツがやたらと似合う、ハードボイルドなおっさんがいた。

……うん、見たところでサッパリ状況が掴めなかった。とりあえずおれに分かることはただ1つ。やっぱり、正義の味方が来たなー、ということぐらいだった。イヤ、まあこの啞え煙草のおっさんがその名乗ったわけではないが、こう、客観的に見て、そう見えるとい

うだけだ。

……とりあえず、そろそろ、限界だ。処理落ちを更に超え、1周回った感じがする。つまり、俺のしたいことはただ1つ

（次から次へといったいなんなんだよおおおおお！！！！）

全力で叫ぶことだけだった（ただし脳内で）。

第1話 マッドとカプセルとハードボイルドから始まる新しい人生（後書き）

と、いうわけでここでいったん切ります。フッフッフ、どうですか？ 続きが気になる終わり方でしょう？ だから早く続きが読みたいと言う方は、バンバンお気に入り登録し、感想を俺にください。お気に入り登録をすれば次話更新がいち早く把握できますし、感想を書けば俺のやる気がUPして執筆スピードがあがるなど、いいこと尽くしですよ？

……え？ ほとんどお前しか得してないだろって？ イヤダナー、ソナコトアルワケナイジャナイデスカー。

ちなみに、主人公はもちろんこの1人称語りの赤ん坊です。名前は後数話ほど投稿したら出すつもりです。

さて、今回はこの辺でお開きにしましょう。ではでは！

第2話 衝撃の事実判明。そして謎のオネーサン登場！（前書き）

あー……、やべー、スゲー眠いッス……。9時からぶっ通しで書いてたからなあ……

まあ、時間かけた分いい出来……。かはわかりませんが、とりあえず、どうぞ。

第2話 衝撃の事実判明。そして謎のオネーサン登場！

〱 Side 富士樹海 地下研究施設 赤ん坊〱

前回のあらすじ！

家族を火事から助けて死んだ俺は、目が覚めたら何故か幼児体型になって、カプセルの中に浮かんでいた！

そして、目の前には高笑いしている見るからにマッドサイエンティスト（ド変態）なおっさんが！

必死で状況を把握しようとしていると、床の魔方陣らしきものが光り輝き、そこからは洪く煙草を吹かす、ハードボイルドなおジサマが登場！

俺、余りに立て続けにわけが分からない状況が続き、大絶叫！

……うむ、とりあえず落ち着こうとこれまでの状況を整理してみようとかのあらすじっぽく纏めてみたが、やっぱりわけが分からん。むしろまた大絶叫しそうだぜ……

というか、マジでこのハードボイルドが服着て歩いているようなおっさんは誰なんだろう。今もニヒルな笑みを口元に浮かべ、ブルブルと震えているマッドのおっさんを見つめているが、やっぱり悪者を倒しに来た正義の味方的な人なんだろうか、やっぱり。

「くつ、貴様、いったいどうやってここにたどり着いた！　ここに来るまでのルートには、百以上の魔法トラップが仕掛けてあるはずなのに……！」

「……それは、私」

と、啜え煙草のおっさんの背後から小さな人影がゆっくりと出てきた。それは、オレンジ色の髪をリボンでツインテールに括り、右目が緑色、左目が青色の……つまりオッドアイのちんまりした少女だった。

……？　何だろうこの感じは。こう、なんか胸がモヤモヤする。
うーん？　何だろう、こう、何と言つか、この少女を見た瞬間に、デジャヴ既視感をこの少女から感じたんだが。……いや、そんなはずはない
だって俺はこの少女どころか、オレンジ色の髪やオッドアイなんていう非現実的なものだって見たこと無いハズだ。

「何を！？　その『無音拳』ならともかく、貴様のような小娘に我がトラップをどうこうされてたまるか！　喰らえ、『アイアム・グレイト・サイエンティスト！』セフテンデキム・スビザムタリヌー コエウンデイス・イニミクム・サキテント 闇の精霊17柱、集い来りて敵を射て！　魔法の射手、連弾・闇の17矢……！」

と、なんかマッドのおっさんが少女を怒鳴りつけたかと思ったら、やたら頭の悪そうな自画自賛の後、何か俺では理解できないどこかの言葉を発した。そして、その右手の平から複数の黒いビームのようなものが少女に……え？　ビーム？

……って、ええええええ！？　何、どういうこと！？　さっきから魔法トラップとか、その前には魔方陣みたいなものを弄ってたから、もしかしてこのおっさん魔法が使えるのかなー、魔法じゃないくても何かスゲー感じの力があるんだろーなーぐらいには思っていたが、流石に手からビームは……って、こんなことっている間に、

ビームが少女に当たる！？　危ない、早く逃げろ……無駄、私には効かない」……え？

「な！？　抵抗^{レジスト}、イヤ、無効化しただと！？　そうか、貴様、『黄昏の姫巫女』か！　『千の呪文の男』ナギィスプリングフィールド^{サウザンドマスター}亡き後は『紅き翼^{アラルブラ}』の誰かと行動を共にしているらしいという話は耳にしていたが、まさか、ガトウィカグラィヴァンテンバークとはな……！」

……えーと、今なんか凄い単語がバンバン出てきたんですが。既視感の正体もバツチリ分かった感じなんです。……え、イヤ、でも、そんなのありえない。

イヤ待て、死んだ俺が赤ん坊になっているというこの状況。恐らくは二次創作でありがちな“転生、憑依”の類だ、と思う。

そして、さつきからマッドのおっさんが使っている魔法っぽいもの、その詠唱。これは殆ど意味が分からなかったが、1部、『サギタ・マギカ』なんて単語には、よく考えたら聞き覚え……いや、読み覚えがある。

極め付けに、『オレンジ色の髪に右目が緑で左目が青のオッドアイの幼女』、『無音拳』、『黄昏の姫巫女』、『千の呪文の男』ナギィスプリングフィールド、『紅き翼』、『ガトウィカグラィヴァンテンバーク』、などという妙に聞き覚え……イヤ、読み覚えのある単語の数々。

……もしかして、この世界って……違う。私の名前は『アスナィウエスペリーナィテオタナシアィエンテオフユシア』……やつぱり、『魔法先生ネギま』かあああああッ！……！！

「く、やはりか。それなら魔法トラップも確かに……しかし、何故貴様等のような奴等が私の研究所に！？」

「そんなもん、テメーが『コスモエンテレケイア完全なる世界』の残党と繋がってるからに決まってるじゃねーか。お前みたいな奴なら俺が来た時点で気づけそうなもんだがな、え？ 『狂気の異端天才学者』アルバート・ノイマン？」

……やはり、ここは『魔法先生ネギま！』の世界のようだ。ということは、あの啖え煙草のおっさんは『無音拳』ガトウ・カグラ・ヴァンテンバーグ、向こうの幼女が神楽坂明日菜……イヤ、あの様子をみるに、まだ記憶を封印されてはいないらしいから、『黄昏の姫巫女』アスナ・ウエスペリーナ・テオタナシア・エンテオフウシア、か。

しかし、ナギ・スプリングフィールド亡き後。そしてガトウがまだ生きていて、アスナは記憶をまだ封印されていない、ねえ。

……また、随分と微妙な時期だな。原作の8〜9年前といったところだろうか。ナルホド、アスナは麻帆良に来る前はこんなことをしてたのか。そりゃ記憶取り戻すにつれて強くなるはずだわ。……てか、今ガトウはこのマッドのおっさん……アルバート・ノイマンというらしいが、『完全なる世界』と繋がっているって言うてなかったか？ いいのかソレ……ってどう考えてもダメだろ。繋がりを持ってるってことは、言い方を変えれば組織の一員ではないということ。でも、そんなノイマンでも『紅き翼』の誰かとアスナが一緒にいると知っているってことは、組織の奴らは誰と一緒にいるかくらい知っていてもおかしくない。

……うん、やっぱりダメだろ絶対。いったいいつ狙われるかわかったもんじゃな……ふ、フハハハハ！……おっと、いかん。つい思考に没頭していたらしい。

しかし、一体なんだ？ ノイマンがまた高笑いをし始めたんだが。

「何だ？ 何がそんなにおかしい」

「ククク……、イヤ、何も焦る必要などなかったことを思い出してね？ 君達程度では、どうやったって私の野望を止めることはできないよ、ククククク……」

「ほおー、何故だ？」

それは確かに気になる。さっきまであんなにブルブル震えてたくせに、急に落ち着き、余裕の態度になるとはどういうことなんだろう？

「フ、何、私の力は魔法だけではないということさ。そう！ この研究所には魔法以外にも様々な力による仕掛けをしてあるのだ！ フハハハハ！ さあ、目覚めよ「おーい、終わったわよー！」……は？」

「いやー、ビビったビビった。超高速電磁誘導弾やら、なんか白く濁ってるビームやら、ほかにも一杯あってさー。ま、アトラクションとしてはなかなかだったけど」

「イヤイヤ千歌さん、貴女ビビるところかむしろ凄くたのしんでたじゃないスか。あと、あんな物凄いトラップをアトラクション呼ばわりできるのは貴女だけですよ……」

「な、なななななななななな……！！！！！！……？」

余裕で何かを語っていたノイマンだったが、ガトウとアスナが出て来た魔方阵とはまた別の陣から出て来た2人の人物……正確には、片方の人物を見てその顔をポカーンとした間抜け面にしたかと思ったら、むしろさっきよりヒドイ感じで取り乱し始めた。

ちなみにその2人の容姿だが……1人はスーツを着た、ガトウと

比べるといくらか青臭い感じを受ける青年。おそらく、若き日のタカミチ「T」高畑だろう。

そして、もう1人だが……こちらは女性。長く腰あたりまで伸びた艶やかな黒髪に明るい赤色のライダースーツ、そして顔には快活な笑顔が浮かんだ、何と言うか、『姉御』や『姐さん^{あね}』という言葉がとてもよく似合いそうな美女だ。……それも、絶世の、というレベルの。……誰だ？こんなキャラ出てたっけ？

「おう、千歌。どうだったんだ、首尾は？」

「ん？ ああ、ちゃんと研究資料やら機材やらなんかはぜーんぶ影の倉庫に入れてきたわよ。後はこの部屋ので最後ね」

「や、やはり貴様は『千の呪文の男』の師にして、『紅き翼』の紅一点、『戦場の紅き閃光』と謳われた、あの四季千歌か！？」

「当ったりー　そう、アタシはアンタの言ってる四季千歌で間違いないわよ」

……え？　マジで誰、この人？　つか、『紅き翼』に女っていたか？　イヤ、いなかったはずだ。……じゃあ、この美人のオネーサンはいつたい……？

「そ、それに私のトラップを突破しただと！？　そんなバカな！　アレらは私がこの子等を創る過程で得た知識を総動員した非の打ち所の無いトラップのh「あー、ちよつと黙っててくんない？」っておい！　わ、私の研究機材や資料を影の倉庫に入れるな！　って、ああ、凄い速さで吸い込まれていく！？　おい、やめr「ハイ、しゅーりょー」……orz」

と、俺がこのオネーサンの正体について疑問を募らせている内に、この部屋にあった俺達幼児の入った5つのカプセル以外は全て、オネーサンの足元の影に凄まじい速さで吸い込まれてしまった。……あれだけゴチャゴチャしていた空間が、今や360度スッキリとした更地になってしまった。そしてノイマンは、余りにショックだったのか跪いてorzポーズをとっている。

「クソッ、クソクソクソクソ！ この私の野望がこんなところで潰えるなんて、そんなことがあってたまるか！ こうなったら「さて、あとは最後の仕上げね。ガトウ、タカミチとアスナちゃん連れて先行ってて」……何？」

「ああ、分かった。きっちり始末を付けてから来いよ」

「……千歌さん、頼んだのは私なんだから、私も最後まで……」

「いーのよ、アスナちゃん。確かに私がここに一緒に来たのはアスナちゃんにお願いされたからだけど、こいつに関してはアタシも結構怒ってんの。だから、ね？」

「……うん、わかった」

そんな会話の後、千歌さんとやらを残し、ガトウとアスナ、それにタカミチは、ガトウ達が来た魔方阵から出て行った。

その途端……千歌さんは先ほどまでの快活な表情とは一転、いっそ冷たささえ感じるほどの無表情になった。そしてその身からオーラののようなものが迸り、同時に、凄まじい殺気を……そう、正に殺気と呼ぶに相応しいであろうモノを醸し出したのを感じた。

「ヒッ！？ な、何をするつもりだ！？」

「何って、決まってんじゃない。アンタを殺すのよ」

……殺す。確かにこの女性はそう言っていた。そして俺は……余りに濃密な殺気から、この言葉はきつと嘘ではないと直感し、震えていた。

言われた当事者であるノイマンは、今までの震えがたいしたこと無かったように見えるほどガタガタブルブルと震えだしている。

「な、何故だ！？ 貴様にそんな権利はないだろうが！ この私が何をやるうと、私の勝手ではないか！」

「そうね、それは確かにそのとおりだわ。でもね、それこそそんなこという資格はアンタにはないわよ。自分の欲のためだけに数千の人達を誘拐し、その人達を使つて実験、なんてことをしていたアンタにはね。それとも何、ジョークのつもりかしら？ だったらやめときなさい。センスが無いを通り越して反吐が出るわ」

……相当ヤバい奴だとは思っていたが、千歌さんの話が本当なら、こいつは相当イカれているようだ。というか、数千人もの人達で実験つて……俺達を創るためだよな、間違いなく。……ええい、今考えてもしかない、そういう暗い話は後で考えよう。とりあえず今はこの状況の行く末を見守るとしよう。

「グググ。そ、そうだ、我が野望が成就した暁には、貴様に世界の半分をやるうではないか、どうだ」もう、目障りよ。死になさい」

……がはッ！ き、きさ……ま……」

そして、ノイマンは何を血迷ったのか千歌さんを仲間に引き入れようとするようなことを言い出したが、が、千歌さんは途中で遮り、

一瞬で消えたと思ったら、次の瞬間には千歌さんの右手がノイマンの胸に突き刺さっていた。

……胸を刺されたノイマンは、口から凄量の血を吐き出した後、何も喋らなくなり、千歌さんが手を抜いたら、そのまま床に崩れ落ちて、しばらく痙攣した後、動かなくなった。

俺は……わけが分からなくなっていた、というのが1番正しい。恐怖とかそういうものの以前に、この目の前の光景が、現実のモノとして認識出来ずにいる、そんな感じた。……イヤ、もしかしたらワザと認識しないように防衛本能的なものが働いたのかもしれないが、そりゃあそうだ、一般高校生たる俺が数瞬前まで普通に喋っていた人間、たとえソレがどんな悪人だろうが、思い入れが無い相手だろうが、が死んだという事実を普通に受け入れられるなんてわけがないのだから。

「これで終わり、か。……ああ、ごめんねボク、どうも君達を動かそうとしてみてもまったく動かせないもんだったから。嫌なモン、見せちゃったわね」

そして、腕に付いた血を吹き飛ばしたかと思ったら、急に俺の方を向いて話しかけてきた。どうやら、俺が起きている事に気づいていたようだ。と、こちらに近づいてきて、カプセルに軽く触れてきた。

「ふむ、やっぱりコイツが死ぬと動かせる仕組みになってたのね。……さ、行きましょう。こんな陰気なトコとはさっさとおさらばするに限るわ」

そうして千歌さんは俺を抱き上げ、他の4人の少女を何か（多分、魔法だろう）で浮かせて、ガトウ達が出て行った魔方陣から俺達を連れて出て行った。

……とりあえず1つ、疑問をば。

俺ってこれからいたい、どうなるんでしょうか。

第2話 衝撃の事実判明。そして謎のオネーサン登場！（後書き）

うーむ、キャラの口調って難しいなあ。特にガトウ。原作でも台詞が少ないから、喋り方がよくわからん。タカミチも若い頃と原作期とで喋り方が若干違ったりするし。

おっと、伝え忘れるところでした。主人公が今の時点で赤ん坊だと、これから物語を進めていくうえでかなり無理があるということに気づいたので、現時点での年齢は5〜6歳程度とします。

あ、後、眠いの無理して書いたので変なこと書いてあるかもしれませんが、あつたらそれは後でキツチリ直しておきますのでご安心を。

さて、それでは今回はこの辺でそろそろ。お気に入り登録に感想、面白いと思った方はバンバンやってくださいね！ ではでは！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6132y/>

終わりにき進化

2011年11月20日00時09分発行